

ヤスクニ・レポ 287 東京大空襲から79年 月村順一(船橋聖書バプテスト教会員)

2024年3月10日経新聞電子版によると、日太平洋戦争末期に約10万人が亡くなったとされる東京大空襲から79年となった10日、犠牲者の遺骨が納められている東京都墨田区の都慰霊堂で法要が営まれた。ロシアによるウクライナ侵攻や、パレスチナ自治区ガザでイスラム組織ハマスとイスラエルの戦闘が続く中、参列した遺族らは平和への思いを胸に手を合わせた。小池百合子知事は「戦争の記憶を風化させないよう語り継いでいかなければならない。都民の命や暮らしを守り、安全で持続可能な東京を次世代に引き継ぎ、国際社会にも貢献していく」と追悼の言葉を述べた。秋篠宮夫妻も参列し焼香した。小池都知事は関東大震災後の朝鮮人虐殺の悲劇には沈黙しては哀悼の言葉を送ることはやめており、昨年9月1日にもそうした。

大空襲は、戦略爆撃を更に進めた無差別爆撃であった。西川前代表は重慶大爆撃を日本がした悲劇であると良く指摘していた。ピカソによるゲルニカの悲劇も我々の記憶に残っている。しかし、現代の若者はB29爆撃機が日本をほとんど焦土にしたことを知っているのだろうか。1945年3月10日東京大空襲はもはや報じられることが少ない。新聞やネットニュースではあるのだが、NHKも民放TVも報じることにはなかった。この無差別爆撃は広島原爆と同程度の被害を3月10日未明から2時間30分の間に起こした。10万人を命が奪われている。アメリカ軍に

よって東京の下町に1665トンもの焼夷弾が落とされたからである。風化させてはならず、この光景がウクライナとガザ爆撃に連続していると思わなければならない。

あまりの熱気と火の粉によって、生きたまま自然発火する人たち、巨大な火が起こす風で空中高く巻き上げられる人たち。下町の運河や水路に人が入り、顔だけを水面に出してそこを火炎が焼き払う。冷たい隅田川へ飛び込み溺死する人、不燃を信じて逃げ込んだ鉄筋の校舎内で、地下壕で、閉じ込められたまま焼かれて死ぬ。家族や隣、近所ではなくて、町そのものが全滅した。その日本がアメリカに言われるままに軍備を強化している。さらに経済安全保障分野に秘密保護法制「重要経済安保情報の保護及び活用に関する法律案」を閣議決定し、国会に提出したと報じられた。この法案には、大きな問題がある。まず、この法案は、重要経済基盤保護情報であって、公になっていないもののうち、その漏えいが日本の安全保障に支障を与えるおそれがあるため特に秘匿する必要があるものを、重要経済安保情報として指定している。その範囲は抽象的で、極めて広範かつ不明確であり、恣意的な秘密指定がなされる危険がある。この法案と武器輸出まで行う事になる航空機開発を企てている。自民、公明両党は国際共同開発する防衛装備品の第三国への輸出解禁を巡り、日本、英国、イタリア3カ国で開発する次期戦

闘機に限って容認することで、月内に合意する調整に入った。公明は解禁に慎重姿勢を示してきたが、次期戦闘機を「先例」としないことや、個別の装備品ごとに与党の事前審査の対象とする条件を付ける方向となり、容認姿勢に転じた。岸田文雄首相と公明の山口

那津男代表が会談で合意する見通しだ。日本も公然と戦争を準備し防衛で経済を潤す国家に転換しようとしている。日本国憲法の意義を今こそ訴えていきたいと思う。

2024年2月16日奨励
ネヘミヤ記6章「様々な妨げと共に信仰によって歩む」
須田毅（JECA・西堀キリスト福音教会牧師）

バビロニア捕囚後にエルサレムに帰還したイスラエル人たちにとって、神殿再建・城壁修復は大きな課題でした。礼拝を修復することであり、信仰的な回復のための作業でもあったのです。しかし、ネヘミヤの城壁再建は、敵対者との緊張にずっと強いられていたような状況でした。

サンバラテ、トビヤ、ゲシムは、ネヘミヤのたびたび圧力をかけてきた者たちの中でも、ひとつのチームのように言われます。ネヘミヤに危害を加えようとする働きかけだとネヘミヤ自身がかかっているのに、繰り返し働きかけます。「その手に乗るものか」との気構えがあるにしても、何度も嫌な働きかけを受けることは、実際にはエネルギーが消耗するものです。しかも、その畏に乗ってこないネヘミヤに対して、開封した手紙の中で「ネヘミヤとその一味は、ペルシャに対して反乱を企んであるけしからん人物だ」として、隠しているようで中味を公開しながら、デマを吹聴するかのような悪しき行動も付け加わります。「ああ、今、どうか私を力づけてください」(9)と唐突な祈りがありますが、このような叫び・嘆き・祈りは、この時期のネヘミヤにとっては日常であったのでしょう。

神への信仰を基軸として生きるネヘミヤに対して、預言者シエマヤや女預言者ノアデヤ、その他の預言者が働きかけます。一見すると、信仰的な助言をするかのような、激励や導きを告げるかのような助けが来たのか、と期待させるところです。しかし、それは敵対者のチームが、買収した預言者たちでした。神の言葉を預かる職務をする立場であっても、人間的な権力や経済力でひびがかがめてしまうこともあるのだということを、聖書時代にまざまざと見る思いです。

ネヘミヤがなぜ、彼らを買収された預言者であ

り、実質的に偽物であると識別できたのか、明確には言われていません。しかし、ネヘミヤが神殿に安易に入ることのできない人間、たとえば祭司のような立場にはないと、明確な自覚をしていたことは、この判断にも関係があるでしょう。神の御前に、自らのありようをへりくだりつつ謙遜にわきまえていました。

絶え間ない妨害を経験しながらも、城壁再建・修復が52日かかって完了します。これは、比較的短期間のようなものです。恐らく、妨害行為にある程度対応しながらも、ネヘミヤは工事の進捗を調査し、必要に応じて監督的な働きをしたに違いありません。繰り返す妨害に、神経をすり減らし体力を消耗するとしても、城壁と強くする目的を見失なわなかったのです。周囲の民が「この工事が私たちの神によってなされたことを知った」(16)とされています。信仰者が、神から与えられる任務をしっかりと見据えて、それに徹した生き方をすることの尊さを、ここに見ることができます。

キリスト者の社会的課題に対する祈りや参加は、神の被造世界の救いに仕えるための使命だと受け止める信仰者は多いです。集いにつらなる方々は、そのような方々が大半でしょう。しかし、「信仰は人間の内面世界のことであり、外の社会やまして政治に対して、信仰が及ぶということでは、私は理解を異にする」という声も、聞きます。社会的課題について、信仰的使命として参与する人々にとっては、その声は参与する意志にとっては壁です。教会内での不一致であり、それは私たちに一因があると非難されることもあります。しかし、神の救いの完成の中で活動しているという基本姿勢を保つことにより、神の御心の中で用いられることを願って、歩みを進めてまいりましょう。